

# 『ジョン・ダン入門』

## —背信と野心の詩人—

ジョン・ケアリ著  
朝倉秀之訳

### 第六章 変化

変化することが、十六世紀末の人氣のある主題だった。物事はますます悪い方に向かっていくように人々の多くには思われた。スペンサーは「無常」という恐ろしい人物を創造し、シエークスピアは「貪り食らう時」を書き記した。牧歌、黄金時代の神話、墮落のない原始教会というピューリタンの概念、古典文学が教えてくれる効力……このような事柄や別のことを想像することで悪化していく現実から東の間の逃避ができた。広く信じられていたように、この世界はだんだん年老いてきて余命幾ばくもないかもしれないなかった。キリスト教紀元の初めからこのような考えが流布していた事実があるからといって、信仰についての信頼性が減少しなかったのは、実に奇妙なことではある。反対に、三世紀の聖キプリアヌスが書き記したこの世界の崩壊の観察結果は、堂々と十六世紀に引用されていた。まるでその観察結果が、その当時の悲観的見方に反対するためというより賛成するための証拠を提供しているように思えたのである。

ダンは、熱心にその全体を覆う憂鬱を描き出した。『第一・第二周年詩』の中と同じように説教集の中で、この世界が憂鬱病を患っていると述べた。その症例のいくつかは、聖キプリアヌスからの直接

の引用である。例えば、今の人が背丈が短く、長生きもしないし、祖先とくらべて青白い顔をしていた、とか、夏は昔ほど過ごしやすくなく、赤ん坊が白髪で生まれた、というように。しかし、ダンが変化に関心があるのは、こういう類の一般的な空想を越えた深いものがあつたし、もっと個人的なことでもあつた。ダンは「無常」を単なる理解しがたい外見上の効果とは見なかった。むしろ、ダンが考えているのは、不安定は自分の心の一部であり、自分について語ることは（詩の中で繰り返し試みているのだが）すなわち、変化について語ることであつた。だから、語りながら変化するのである。すでに気づいていたように『日の出』や『一周年記念』は語り手たちが初めに言ったこととは正反対のことを言うことで終わりとなる。この章ではその他の例を見出すことになる。

ダンは、はっきりと自分自身が心変わりしやすいことに気づいていたようである。だからそのことについて冗談を言うこともあつた。十八歳のときに描かれ、最も初期のものであると認められる肖像画には、スペイン語のモットー「アンテス・ムエルト・ケ・ムダド」(「心変わりするより死んだ方がまし」)が記されている。しかしながら、このように心変わりしないと断言することは、状況が変われば本質が変わってしまうことを意味する。モンテマヨルの『ディアナ』

からの引用であるが、ディアナが自分の愛をシレヌスに誓うとき、砂に書いた言葉とその信頼に異議を唱えるような詩を説明している。

愛が命ずるものをご覧なさい。

だからこそ、きみは女が言い、

砂に書いたことを

信じるのです。(2)

そのモットーの確かさが崩れる。もはや愛を何に仕上げるのかはつきりしなくなる。そこで、ダンには自分の肖像画からこちらをじっと見つめて、私たちが四苦八苦するのを観察している。

同じようにダンが『女の不実についての弁明』の中で自分の心変わりしやすい性質に苛立っているのを知る。そこで、ダンは一歩無知で鈍感な男たちがごくまれに心変わりする(3)と主張する。しかし、自分が気紛れであると認めることも、ダンを動揺させる。『祈祷集』の中で自分の青春を思い出すのは、「変わりやすい気持ちと優柔不断」の時代としてである。その期間にダンほどのように過ごしたらいいかを決めかねて時間のほとんど全てを費やしてきたのである。(4)ダン自らが報告しているように、研究者として喜んで何か特別な主題に「夢中になったり、虜になって」きたわけではなかった。だから、ダンはその主題から別の主題へと浅く放浪した。(5)ダンの背信は、通常の安住の場所がないことの一例にすぎなかったのである。その不安定さのためにダンには苛立っていた。なぜなら、自分を制御できなかったからである。困惑して見守らねばならなかったのは、自分の意図するところが歪められ、消えてしまっていたところである。

心変わりには自然に逆らって不変性を

生み出してきた。だから、心変わりしない時に

私は誓いや祈りの中で心変わりするのだ。(6)

ダンが祈るとき、祈りに集中できなかった。ダンには自室にこもって、神や天使がここに来てくれるようにと呼び求めたのである。

、そしてそこに神と天使がいても、蠅の飛ぶ音がしたり、馬車のガタガタなる音がしたり、ドアの軋む音がすると、私は神や天使に集中できない。私は祈りと同じ姿勢のまま話し続ける。目は天を仰ぎ、膝を折り、まるで神に祈るかのように。そして、神か天使が私に求めるとしても、私はその祈りの中で神の最後を思うとき、私は話すことはできなくなる。私が何をしているのかを忘れてしまったことを発見することもあるが、私が忘れ始めたときには、喋れなくなる。(7)

見出すものなら何でも、ダンの気を紛らわせるのに十分だった。膝の下の麦わらにしても、頭の中の空想にしても。好機が巡ってくることを考えたり、別のことを考えたり、敏感に感じることで、詩作に駆り立てられることはあったが、精神的な静寂さを求めるときには、障害になった。もつと悪いことに、ダンには言葉で警告することを抑えることができなかったし、祈りの言葉の中に不道德な二重の意味を見出し続けた。放蕩の限りを尽くした青年時代の記憶も、どんなに激しく排除しようとしても、ダンの精神に入り込んでいた。

(8) 執拗にダンは新らたな努力をし、膝を折り、この世の考えを全てぬぐい去り、全身全霊をもって神に集中したのである。それは良いことではなかった。「突然に身体が雲散霧消して無益な考えに陥り、何も考えられなくなったことが分かる。」(9)

同じことはダンが説教しているときにも起こった。ダンの身体が説教壇で忠実に口を開けたり、閉じたりして立っている間、ダンの精神はそれ自体の使命を帯びて突き進んだ。ダンは目の前の会衆に向かってこのように認めている。

ここにいる私が全てとは限りません。今、ここでこの聖句に基づいて説教している自分と家の書齋で聖グレゴリオか、聖ヒエロニムスカが以前にこの聖句について一番良いことを言っていたかどうか考えている自分が同時にいるのです。ここで、皆さんに向かって話しています、ついでながら同じことで、私が話してしまったときも、皆さんがお互いに話し合うようなこと考えてもいるのです。(10)

心が集中できないことは、それ自体そんなに珍しいことではない。誰もがいつかは似たような事を経験しているのである。私たちが感心するのは、ダンが感覚的に敏感過ぎることと自分の欠点をあからさまに暴き出すことにある。ダンは気を紛らわせることで自分を紛らわせる。

ダンが最も執拗に思い描く様式の中には、このばらばらになっている心の状態への苛立ちが原因になっているものもある。それで、ダンは絶対的なものや完全なものを求めるようになった。すなわち、

エリザベス・ドゥルーリーのような「私が思いつくことのできる最高の人間」(11)を具現化した想像上の女性であり、ダンが説教の中で述べているように「存在する全てであるだけでなく、存在しない全てでもあるもの」(12)を包含した神のごときものである。永遠について長々と語る熱烈さと、思想や慎重な計画を飲み込んでしまうその力もここでは関係している。さらに、世俗的な段階で言えば、自分を「この世にある共同体」(13)に結びつけることのできる就職への願望も重要である。このように、様々の方法でダンは、自分の魂の持つ活力を採り入れ、それを統合へと導くように焦点を絞る必要性を示した。ロヨラの『霊の鍛錬』は、同じ理由でダンにはかなり役に立った。というのも、心を集中させる日課が書いてあったからである。

精神が流れ込んで多種多様になって行けば行くほど、自分は限定された自己なのであるという自覚はますます強くなる。ダンは若い頃、この何処にも属することのない気持ちのために、心がかき乱されたり、あるいは、少なくとも興味をひいたり、また、それを打ち消そうとしてきたどのような段階もじっくりと考えてきたように思われる。一五九〇年代にロウランド・ウッドワード宛に手紙を書いたとき、ダンは必要だと考える自己規定の訓練を提示するために集光レンズのイメージを使っている。

それからぼくたちが自身の中に自分を求める。なぜなら、レンズを使って太陽光線を集めることで、さらに強力なエネルギーを持つ太陽を人間が通過させるように、

もしぼくたちがぼく自身になるなら、美德の芽生えを射抜くことで、その無価値なものを焼き尽くすこ

とができる。たとえ、それがぼくたちの心に住み着  
 いているとしても。(14)

本物の自己を実現させるためのこの単純なやり方では、とうてい  
 ダンは満足しなかった。詩の中に見られるように、ダンは本来的に  
 自己は実現できないことを認めている。「ぼくたち自身」とは、正確  
 に言えば「ぼくたちが知らないこと」(15)である。はかない矛盾した  
 意識が高まっている中であつて、ダンは、はつきりした個性を分け  
 ることができなかつた。詩は、幽霊、反射、影、明滅して無になる  
 時点での人々のようなはかない存在で満ち溢れている。その魂は、  
 煙りとなつて回りの空中に漂っている。愛する人の溜息が、魂を消  
 滅させる。この全滅するかもしれないことに対する反動として存在  
 するからこそ、ダンの自己中心性と芝居がかつた自己が、生きるの  
 である。自分の性格についての確信がもてなかつたから、ダンは、  
 詩の中ではつきりした自己を強く印象づけるように命令形をとつた  
 のである。

詩以外でその同じ不安に満ちた決断の徴候は他にもある。例えば、  
 独特の精巧に織られた服に身を包んだ肖像画にしてしまうダンの趣  
 向。その一五九一年の細密画法の肖像画は、短剣を身に付けイヤリ  
 ングをした派手で威勢のいい若者を描き出している。そのロジアン  
 所蔵の肖像画は、憂鬱な恋する男であり、襟の回りには高価そうに  
 見えるレースをつけて黒く大きな帽子を被つてのんびりとくつろい  
 ている。アイザック・オリバーが描いた細密画の中に、私たちは綺  
 麗なひだ襟とあごひげをたくわえたこざっぱりした宮廷人を見い出  
 す。その一六二〇年の肖像画は、ある種のローマの役人の服装をき  
 どつて、正面を真っ直ぐに見ている。おそらくは古代の人々が不屈

であつたことの価値を示すためであろう。このような装いの注意深  
 い取り合わせは、ダンが両腕にかけたコート、名字についての語呂  
 合わせ、あるいはジャック・ダンとドクター・ダンという二つの個  
 性の発明について考慮するのと同じ目的を果たした。それで、ダン  
 の扮装の中で一致しない特定の意図を安定させた。窓ガラスに書い  
 た引つかき傷の署名のように、すべては自己を明らかにするための口  
 実だつた。

自分の頭の中の激しく揺れ動くばらばらな気持ちと考えに異常な  
 ほど気付いているので、ダンは外側の世界に存在する同じ不安定さ  
 に敏感になりがちだつた。物質的な対象の一面は、ダンにはいつ  
 もひどく魅力的に思えたが、ものが存在するには無から有に変化す  
 る必要があつたという考えであつた。もちろん、このことでダンよ  
 り以前の他の人々は努力してきたのである。天地創造に関する広く  
 知られた神学的な疑問は、この世は何から作られたのか、というこ  
 とだつた。それには三つの可能な答えがあつた。一つは、アリスト  
 テレスが説いたもので、この世はいつもここにあり、それゆえ、こ  
 の世は決して創造される必要がない、というものであつた。第二番  
 目の新プラトン学派の見解は、プロレマイオスの説に由来して、  
 永遠なるものが神に起因してはいるが、神とは切り離されて存在し  
 ており、神はこの世のために生の材料としてこの永遠なるものを用  
 いてきた、というものであつた。第三番目の見解は、神が無からこ  
 の世を創造された、というものであつた。この不可能な最後の見解  
 が、ダンを一番引きつけた。というのも、この見解は、神の知性を  
 跡形もなくしてしまふ主権を達成しているからである。同様に、ダ  
 ンの生涯において創造についての正統なキリスト教の理論となつて

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

いたのである。

しかし、キリスト教の正統信仰という紛れもない事実によって、何がその創造についてのダンの絶賛のことばと歓喜のことばを際立たせるのかということである。ダンはおとなく受け入れてはいないし、キリスト教が信じる必要ありとした不可能な他のことにも屈服しない。他方、根本的な事柄へと具体化する創造というその後の単調な骨の折れる仕事を続けて称賛もしない。神がこの地と被造物を創造されたことは、ミルトンが『失楽園』で描いてみせたけれど、あきらかにダンには興味がなかった。それは無から自分を虜にする何かに変わる移行点だった。ダンには聖職につく準備をしているときにこの主題を選んで『神学論集』の中で書き続けた。それだけがダンにとって重要であることを提示しているからである。「この宇宙のすべて、すなわち地、海、空気、天そしてすべてのものが昔は無であつた」<sup>(8)</sup>とダンが『神学論集』の中でよく考え、その主題を綿密に提出している。説教集の方も意気盛んにその話題に戻るかと思うと途方にくれたりすることがしばしばである。ダンが指摘するように、その話題は他の何ものにもまして感謝すべきことなのである。確かにキリスト教徒である人間をお作りくださったことで神に感謝すべきなのである。結局のところ、神は「わたしに石でも惑星でも獣でもユダヤ人でさえも残せた」<sup>(9)</sup>の。しかし、「わたしが何処にもいない、無であつたとき」<sup>(10)</sup>神がいやしくもわたしをお作りになつたことは、究極の不思議である。なぜなら、ダンが後の説教でその論点を追求するように、「小さいものと無との間の不釣り合いは、小さいものと全世界との間より果てしがない」<sup>(11)</sup>からである。無は、存在の敵対者である。すなわち、神がそれを存在の根拠としたからである。

厳密に言えば、ダンが私たちに認識させるようには、いくら熱心に考えても、ここまで考え付かないことなのである。思考を絶したものであるのは、一度ある事を思えば、無ではなく、何かであるからである。それを無にするためには、思考の遠い側にある空間に押し戻さなければならぬ。すなわち、無思考を思考しなければならぬということである。ダンはこの種の思索の中で遊ぶことが好きだった。というのも、実在しないものの縁をさまようことができたからである。無をつかもうと溶けていく精神を観察することは、ダンが詩の中でしているように、主人公たちが非物質化するのに似ていた。企てを消してしまうという二つのことは、存在の不確かさを強調することになった。「この無というものは、なんと分かりにくいものなのか」とダンが嬉しそうに叫ぶ。<sup>(12)</sup> 無は、理解可能なものすべてがすべり込むブラックホールだった。

さらに、もし神が支える力をお使いになるのを止めるなら、すべてのものがすべり込んでいくと、ダンが信じていた。ダンの考えによると、造られたものは自ら存在がままではなかった。在るがままに在るためには神の働きへの克服しがたい努力が必要だった。神が一瞬たりとも造られたものから御心を逸らすなら、無が飲み込んでしまうであろう。説教集でも、しばしばこの突発的な事態をとりあげたし、ダンが『神学論集』を書いたとき、すでにこの偶発性の問題に感銘していた。「神はご自分を必要としない無を創造されたのである。その無というの、ご自分の特別な管理を飛び越えては一瞬たりとも再び無に戻れないのである。すなわち、天使と我々の魂は、このように神ご自身に頼ることから解き放たれてはいないのである」<sup>(13)</sup>その魂が生まれつきか、それとも神の恩寵の徳によつてのみ不死であつたかどうかは、事実神学論争の事柄であつた。二つの仮

説の間で選択するとき、ダンは意味を十分に汲んで正当ではない学説をとった。創造されたときに他のすべてのものと一緒にあつた魂は、神が一般的なキリスト教の教義からは逸れてしまわないとしても直ちに消えてしまうであろう、<sup>(2)</sup>という確信である。他のどんな神学的な問題とも同じように魂が不滅であることは、究極的に想像力しだいで決まり、信者が持つている想像力への手がかりを提供する。ダンが信じることを選び取つたのは、魂が消える装置を持つているということである。なぜなら、もしそうでなければ、不変であつたことになり、変わらないことにはダンの興味をひかなかつたからである。ダン自身自身のように変わることで宇宙を望んでいたし、想像していた。その宇宙の中で、物事はすべて無の縁に絶えず存在していたのである。

靈魂消滅の訴えは、これをよく示している『聖ルーシーの祭りの夜の歌』に行き渡っている。そこで、ダンは天地創造に先立つ原初の無以上のさらに失われた何もないような無へと帰ろうとしている。彼の魂は、無という第五元素であることを望み、すでにそうであると宣言する。

ほくは彼女の死（その言葉は彼女を誤らせるが）に

よつて最初の無の精髓となつたのだ。<sup>(2)</sup>

定型的にその考えは、二つの方向に動く。自己否定であると同時に自己肯定である。無を追い求めるけれど、ダン自身自身を「ありきたりの無」ではない特別な無として評価する。無の間にあつてさえ、ダンは無欲的に区別している。この筋の通らない考えは、心学的には真実なものとして私たちの心を打つ。それがただダンの

ようにそう思えるからだけではなく、それが死別の中に含まれてくる複雑な感情を再び生み出すからである。死者が新しく、空っぽの、関心のない世界で望む誇り高い軽蔑は、ある意味でまた無欲でもあるのだが深いところで自己評価である。なぜなら、それは慰めと最新を拒絶し、失われたものへの全面的な献身であるからである。ダンにはひねくれた悲しみを声に出している。大切な死者を暗闇と冷たさが抱えているが故に、その悲しみは暗闇と冷たさを喜んで抱擁するのである。

愛し合う者たちよ、きみたちのために、ほくのもつと

小さな太陽が、今このとき山羊座へ回り、

新しい精力を手にいれてきみたちに与えようとする。

夏をことごとく楽しみなさい。

彼女は彼女の長い夜祭りを楽しむのだから、

ほくは彼女のもとへ行く準備をし、このときを

徹夜の祈りとも祭りの前夜とも呼ばせてくれ。

今宵こそ一年の半ばであり、一日の真ん中でもあるのだから。

それにもかかわらず、並外れた無であるという強い衝動は、無であるという強い衝動と矛盾する。並外れていることは、何者かであることである。詩の中のこの混乱は、ダンを悩ませている他の神学的（かつ心理学的）問題を劇化している。すなわち、誰であろうと地獄で呪われた者でさえ、実際には無になりたいと願うことができるかどうかということである。説教集の中でダンはいよいよその可能性を否定している。しかし、不安げな激しさでそうしているの

あり、限定してもいるのである。このことからダンがいかにこの問題に悩まされているかが分かるのである。例えば、靈魂消滅に対する欲求は出来ないと言張する一方で、もし人々が靈魂消滅について考えるなら、できないけれど、人々が時のはずみではそれを望むことも認めたのである。

突然、人は自分自身が無でありたいと願うかもしれない。なぜなら、それが現在の惨めな気持ちから自らを解放するように思えるからである。しかし、故意にはできないのである。なぜなら、人間が望む何でもなお持っている以上により良いものにちがいないからである。そしてより良いものは何でも無ではないのである。<sup>(23)</sup>

ダンはこの理由づけを聖アウグスティヌスから論理的に導き出した。聖アウグスティヌス自身は自由意志についての論文の中でその問題をじっくりと考えてきたからである。アウグスティヌスが結論づけたように、存在したくないと願うのは不合理であろう。なぜなら、存在しないということは、何かではなく、無だからである。そして、論理的には、選ぶ対象が存在しないときには選ぶことができないのである。ちなみに、アウグスティヌスの心に浮かんだことは人々が無になりたいと願って自殺をすることである。しかし、アウグスティヌスは読者に忠告するのは、このような非論理的な振る舞いで取り乱さないようにということである。<sup>(24)</sup>

自殺願望のあったダンは、この結論に満足しなかったようである。この点に戻ってくるたびににダンの関心が示される。トマス・アクィナスを読むことで、おそらくは自分の疑いを確かにしようとしたので

あろう。なぜなら、アクィナスはアウグスティヌスに反対するためにアウグスティヌスを引用しているからである。アクィナスが指摘するように地獄で呪われた者は、確実に理性的に無を選ぶことができる。理由は呪われているより呪われない方が快適だからである。<sup>(25)</sup>この事柄に関してのさらに気の重い考えの中で、ダンにはそう思えることなのだが、呪われない人なら正に許されるべきものとして靈魂消滅を選ぶのではないか、ということである。地上の生活の惨めさについて論じた後、『祈祷集』の中で、ダンは宣言する。「以前存在していれば、この惨めな感覚を持つことができるのに、ああ、誰がこんな状態のままこの地上での存在を受け入れるのだろうか」<sup>(26)</sup>これは、無であることを決心することがとても自然だから、もし機会があれば、誰でもそうするであろうということをも単純に結論づけている。

『聖ルーシーの祭りの夜の歌』についてフランク・カーモードは述べている。「詩人ダンは、神学者ダンが不可能だと見なすことを当然のこととして要求している。ダンは、人間が靈魂消滅を要求できない論点にいつも立ち返っている。」<sup>(27)</sup>後で分かるように、二つの論点で間違っている。神学者ダンは、人間が靈魂消滅を要求できないことを首尾一貫して断言しない。そして、詩人ダンは人間が要求できるとは主張しないのである。ダンは、自分が無であり、自家撞着的で自己肯定的に自分が無の間にあつて区別されるべきものであると宣言する話者を提示する。詩と神学は、同じ両面価値と実在しないものと同じ平静を失わせる魅力を反映している。

だから、ダンにとって世界は無から作られたのであり、いつも再び跡形もなくなるようになっていた。世界は、それを構成する元素

が際限なくお互いに場所を交換していたから、不安定でもあった。ダンは、この広大無辺で遠回しの表現が同じ性質の主題であることを見出した。「準基本的なものすべてを構成している元素それ自体の中に、黙認は、全くなく、お互いに有為転変の変容がある。凝縮した空気は、水になり、固体になる。純化した空気は、火となり、論争を巻き起こす、明らかでない固体となる」とダンは説教の中で論じている。<sup>(28)</sup> 問題が変化していく状態の混沌の中で、ダンは自分自身の解決したものに對する問題を見た。流転していくイメージが起ころのは、ダンが自分の精神を作られた自然に住ませるときである。人間と動物は、地球を浸食しながら、問題を台無しにしてしまう豪雨となる。時間的な事柄のすべての中で流転することは、「墮落に流れ込む」<sup>(29)</sup>とダンは言う。「祈禱集」が主張するように、世界は絶え間なく「その原因となる部分のすべての中で変化し、溶解する。」人間は「土くれではなく、雪でできていて、まるで塑像のように溶けてしまふ。」人間は「溶鉱炉の中で溶ける鉛のように、鉄のように、真鍮のように」<sup>(30)</sup>注ぎ出される。

それほど多くの溶ける被造物とともに、地面は、ダンの想像の中で実際に液体に変わる。ダンは「教会の庭がいたるところ幾重にも波をうった墓で膨れ上がっている」<sup>(31)</sup>のを見る。人々が信じられない早さで溶ける。「太陽は、一分間に何マイルも進むのに、地球に対する多くの身体ほど早くは進まない。」<sup>(32)</sup> 私たちの心を打つのは、その非現実性である。本当に、ダンが熱が出たときに、その文章を書いたし、自分が素早く沈んでいくのを感じた。しかし、ダンの症状の正確な記述ということではない。ダンが描き出すものは、稲妻のスピードで溶けていく身体についての衰えた幻想である。ダンがことうするのは、溶けていくという考えが、否応なしにダンを魅惑する

からである。ダンの神との和解と他の人々の神との和解は、同じように溶けていく肉体という点からみると関係がある。神の審判は「内臓が液化し、溶解し、溶け出す」原因となる。キリスト教徒の喜びは「自分の魂の一番内側にある内臓が液化し、溶解する」ことである。「心臓から液化し、溶けて、注ぎ出ること」<sup>(33)</sup>は、神の慈悲に適切に応答することである。

説教集には素早く溶けて行く描写で溢れているが、恋愛詩の中では溶けて行くことについて書くため異なる異なった口実を見つけださなければならなかった。なぜなら、墮落とかキリスト教徒の体内の機能の状態は、きちんとその内容に合っていないからである。ときどき、ダンは詩の全体の暗喩的な標準を事柄が変化する状態で考察している。もし『別離』、涙を流すことについて『の中の涙に起こることを見るなら、このことを理解することができる。女性の顔の面影を映し出しているとき、涙は貨幣になる。だから、丸い涙の形は、小さい人間を閉じ込めることにもなり、涙は子宮であることを暗示している。そして、涙は果実になる。それから、涙は落ち、再び水になる。そして、地球儀に固まる。涙が何であるのかということについての優柔不断な態度は、涙は物質的には何で構成されているのかを想像する際の絶え間ない変化によって生まれている。愛の脈絡の中で、溶けて行くことは、気持ちが高まるときの女性器の分泌物をも暗示する。ダンはこのことを『魂の発展』の中でも紹介している。愛玩動物の猿がアダムの第五番目の娘シファテシアと恋に落ちるといふ興味ある場面に出てくる。

彼はじつと彼女の顔を涙で一杯の目で見つめ、  
小豆色の手で上手に彼女の子山羊製の前垂れを



## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

恐がったりせずに、持ち上げる、

最初、彼女は愚かにもされていることが分からない、  
その美德は、彼が触れることで、

むずむずする興奮に近づき、全く溶かしてしまふ。(28)

不謹慎な内容にも関わらず、詩行に表れた柔らかい喚起は、真面目な出来になっている。「小豆色」という単語は、動物の手の色だけでなく、毛皮のような優しさを立派に暗示している。溶けて行く女性、また『無頓着な者』（豊富さが溶けている彼女）の中にも現れている。ここでは贅沢に溶けて行く退屈で裕福な女性の語調を取り上げる。「別離、窓ガラスに刻んだぼくの名」の中で、湿気が口説かれた召使い（「きみの溶けた侍女」から出てくる。「離別、嘆くを禁ず」の初めで、溶けて行く恋人たちを見る。

徳高き人々は穏やかに死んでゆくとき、

自分たちの魂に、行きなさい、と囁く、

しかし、悲しむ友人の中には、「いま息が絶える」

と言う者もいるし、「まだ」と言う者もいる。

だから、ぼくらを溶かしてくれたまえ、

音も立てず、涙の洪水も、溜息の嵐も起こりはしない。

世俗の人たちにはぼくらの愛を知らせるのは

ぼくらの喜びの冒瀆となるだろうから。(29)

ここでの「溶かす」という単語の奇妙さがアレン・テイトを感動

させた。「わたしはその単語の歴史の中で、人間を分離するという考  
えの二番目の意味でさえ、見つけたことができな(30)と述べて  
いる。事実、ぴったり合う辞書の意味は、テイトが主張しているほ  
ど見つけるのが難しくはない。もちろん、「溶かす」という単語がこ  
のような敬虔な環境の中で濡れた生殖器(あるいは、その事柄にた  
して、「死ぬ」の陳腐で退屈なエリザベス朝の性的な地口落ち、テイ  
トはこれを紹介したいと思っただのであるが)という意味を持つことに  
は問題はない。起こっていることは、恋人たちの肉体が離れて行つて  
おり、魂が背後に残されている。そして、ダンが頼むのは、肉体は  
全く普通の十七世紀の「溶かす」の意味であり、まるで肉体が分離  
しているかのように静かにその場から消えて欲しいということであ  
る。しかし、「溶かす」という単語が、どの辞書の意味にも合わない  
のだが、弱まる暖かさや優しさや柔らかい不本意とが含まれたそ  
の連の暗示的意味になってくるのは本当である。その単語のみなき  
る豊かさは、ダンにとってその詩的な可能性を秘めた指標である。

人間は、溶ける唯一のものではない。両極の氷も『愛の交換』の中  
のように溶けるのである。そこで女性の美が「いちどに両極を溶  
かす」ことができる。あるいはサマセットの祝婚歌の中で、もしフ  
ランセス・ハワードの「燃え上がる目」あるいは、サマセットの  
「恋する心」が、凍った北極へ運ばれるなら、北極へ向かう貿易行路  
を塞ぐことになるだろう。

西か東の道が溶け、

その容易な液体の入口は広く開くだろう。(31)

この詩行の巨大な滴り落ちる入口は、ダンがフランセス・ハワー

ドの目やサマセットの恋によって実際に呼び覚まされるのではなく、ダンがその中に地球規模で溶けて行くことについて書く口実を見いだしているから現実味があるのである。ダンがアゾレス群島の航海について書いた書簡詩『風』の中で、船自体が溶け始める。

燃える教会が一つの出口になるときの鉛のように、

嵐の中で荒れくるった水が今調子を崩す。(38)

ダンの直喩は、船の甲板の間からしみ出てくる水漏れ防止に応用されていて、火事になった教会である。その鉛の屋根は、そのまわりに溶けて滴り落ちる。全体の建物は蛇口から流れ出る金属となつてゆつくりとした流れになる。確かに残っているダンの詩の初期のもの『腕輪』の中で、ダンの機知に富んだ論議は、もうすでに十二の金貨に溶かす必然性へと纏められている。その金貨はまた、溶鉱炉の中で生きた存在なのである。(39)

水腫病は、肉体が分泌物で膨れ上がる憂鬱な状態で、皮下組織に集中しているが、あらゆる病気の内でも最もダンには魅力的であった。なぜなら、肉体が液体に変わるといふ実生活の凡例を提供しているからである。水腫病患者は、繰り返し詩の中に現れるし、通常全く恣意的に引用される。エレジー『恋人について』の中の「酒浸りの水腫病のオランダ人」とか、『香水』の中の「水腫病みの父親」とか、『風』の中の船の洪水にあった監獄「塩で詰まった水腫病」など。ダンの他の想像上の強迫観念のように、水腫病は、ダンが宗教の道に進んだときに精神的な使い方を採用しなければならなかった。自分の妻の死についてのソネットで神への誓願文は、この修正がなされたことを示している。

しかし、わたしはあなたを見出し、わたしの渇きを  
あなたが癒してくださいましたが、聖なる渇きの  
水腫は、わたしを今も溶かします。(40)

ダンには神と共に酔っていて、もっとそうなりたいと思っている。憧れることと溶けることは、ダンの着想の中では共に結びついている。神は究極の湿り気である。『第二周年詩』の中で、ダンは死の床で、魂がしっかりと潜り込むことができるまで魂を駆り立てて膨らませようとしている。

あなたが行ってしまふまで、なお渇きを持たせ、  
なお飲ませてください。それが唯一の健康です。

そのような水腫病になりたいのです。(41)

表面上の段階では、ダンの興味が愛から宗教に変わってしまったが、ダンはお液体化するという概念にとらわれている。液体のイメージは、単純に一つの内容から別の内容に移動している。巨大な涙は、世界を溺れさせ、恋愛詩の中の農場を水浸しにするが、変容を慎重に辿ることで、『ホーリー・ソネット』(42)の中の血や涙で世界の人々が溺れてしまう洪水になる。

ダンの水腫病の関係は、同様にスポンジに興味を持たせた。液体を吸収したり、発散させたりするスポンジの力は、どんな他の機能よりも優れていたからである。ダンはスポンジの目「スポンジの肝臓」(43)のような人間の身体の部分をスポンジに同化させ、些細なことでも着想上のスポンジの役目に携わることになる。説教の真ん中

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

で、ダンは聴衆に次のように教える。

あなた方の記憶、考えを辿って、溢れるほど一杯になる  
スポンジを考えてご覧なさい。もしあなた方が小指でス  
ポンジを押すなら水が出てくる。そう、もしあなた方が  
持ち上げるなら、そこで水が出てくる。もしあなた方が  
その場所から動かすなら、左手と同様に右手にするとし  
ても、スポンジは水を注ぎ出す。そう、もしスポンジが  
その場所に静かにじっとしているとしても、なおその場  
を濡らし、その湿り気を落とすのです。<sup>(4)</sup>

ダンの精神は、その染み出してくる玩具で喜んで水遊びをするが、最も弱々しい意味でだけ宗教的な教えに向かっているのである。しかし、脅されてお金を巻き上げられたり、「搾り取ら」れたりする金持ちのイメージとして使っているのを説明することで結果的には宗教にスポンジを結びつけることになる。その結びつきは、恣意的である。ダンが話したいと思っているスポンジであって、他の人々はスポンジの弁明をダンにさせるほど裕福である必要はない。「人はだれでも、スポンジにすぎない」とダンが別の説教で述べる。「そして、十分に水を吸ったスポンジに置くのが右手であろうが、左手であろうが、スポンジは滴るものである。」<sup>(5)</sup>

流れたり、吸収されるのは、過程として、溶けることに対するのと同じような魅力があった。注目に値するのは、他の正統的信仰のキリスト教徒と同様に、ダン自身が魂は不滅であると信じると告白しているように、習慣的に魂が流れたり、吸収されたりすることについて語っている。まるで、液体かであるかのように。「魂の中に魂

が流れ込むことができる」と『恍惚』の中で魂たちが言う。そして、魂が死んで肉体を去るとき、神が「栄光へと魂を吸い上げて」くださるであろう、とダンは会衆に告げるのである。実際、創造された全宇宙は、最後には「神に吸収され、飲み込まれて」<sup>(6)</sup>しまうであろう。水の動きは、ダンの注意を引く初期の詩の主題の一つであった。「国教忌避」には流れと、どのようにその流れが水路で様々の道に対応するかについての意図的な細かい記述がある。「媚びへつらう逆流」の中の川床に乗り、次にはたしなめ、眉をひそめ、大枝が水の表面に「キス」しようと垂れ下がる。<sup>(7)</sup>水の様々の形態があるからこそ、『心変わり』の中でダンは結論を引き出すのである。

## 心変わりこそは

音楽と喜びと生命と永遠の温床なのだ。<sup>(8)</sup>

ダンには、私たちが見てきたように、確かに変化について憂鬱な見解をとることもできたが、変化すること自体に関しての、また水に関しての関心度は、決して衰えなかった。川と海は、広範囲にダンの著作の中に地理学的な位置としてではなく、魅力的な意味で形が決まらない名も無い鉱床として現れている。ダンは、「主流の引き潮」と「流れの浅瀬でのめまいを起こす渦巻き」とを見分けられるようにと区別しながら、一方では神学論争をしている。「世界が一つの海である」と主張して、その考えを正当化するために引き潮、洪水、深み、嵐で一杯の海の隠喩の渦巻く文章をつけ加える。病気、災害、老衰は、波や嵐として説教集の中に見られるし、私たちの内面の意識の変化と深淵は、同様に水に関する同じ意味を見い出す。海は人が歩き回るように内なる人間を動かしたり、窮地に陥れたりする。

「人間の理解の中での疑念という海」、「人間の意識の中での破壊という海」、「霊が悲しみに沈んだり、飲み込んでしまう海。」<sup>(49)</sup> 海とは、漠然と名もなく底知れないもので、ダンは自分自身が掴まえられたと思つた溶かしたり飲み込んだりする現実そのものであつた。

現代的思想の持ち主の中でもウォルター・ペイターは、この点に關してダンに一番近いように思われる。そんなことは奇妙であるが、機知の王と共通するたくさんのことを持つているからと言つて、姉妹たちや抑圧された同性愛の気持ちを持つてノース・オックスフォードで落ちついて生活していたヴィクトリア朝の人物を思い浮かべる者もほとんどいないであろうからである。しかし、ダンとペイターは、共に生き方においても、深く挫折した人々であつたし、そのことで二人は、現実が続け様に取り去られるものだと見ることになつたのかも知れない。いずれにしても、相似点は明白である。我々の物理的な生活は、年がら年中の動きの中にある、とペイターは断言する。「血液の通路、目のレンズの消耗と修理、光と音の光線一つひとつが脳の組織を改良すること。」思想と感情の内なる世界の中で、物事はなお悪く見える。

、、渦巻きというものは、なおさらに急激なものだし、炎は、さらに激しく焼き尽くすものだ。もはや、目が徐々に暗くなることもなく、壁から色が落ちていくこともない。岸边の動き、そこで水が実際に引いて行く、はつきりとした安心の中にあるのだが、しかし、流れの中ほどの急流、視力、情熱、思考の一時的な行動が漂流する。それは、この動きと共に

あり、印象やイメージや感動の変遷や消滅と共にある。そのような分析は止めにしてしまふ。その連続して消えてしまひ、その奇妙に絶え間なく私たちを織り込んだり、解いたりする。<sup>(50)</sup>

ペイターは自分の題辭にヘラクレイトスをほのめかしているし、もちろん、万物流転の教義をダンを知っていたであろう。しかし、ダンが必要であると感ずるためにヘラクレイトスを知る必要がなかつたのと同様にペイターもダンを知る必要はなかつた。「出典」の問題ではなく、同質の着想の問題である。

人生が駄目にならないようにする唯一の適切な反応は、感動を追求めることであり、出来るだけたくさんさんの生命力に溢れた波動を私たちに割り当てられた時間に詰め込むことである。

全てが私たちの足下で溶けるなら、私たちはどんな激しい情熱にも、あるいはどんな知識に対する貢献にも飛びつくのはもつともである。それは、精神を一瞬自由にするように思える限界を越えたもの、感覚の働き、奇妙な死、奇妙な色、不思議な匂い、芸術家の手になる作品、その友人の顔などである。<sup>(51)</sup>

この自己陶醉の秘訣は、ペイターのもつと信頼できる同時代人たちを憤慨させたが、一方でオズカー・ワイルドや嘆美主義者たちからペイターは熱狂的な尊敬を勝ち得たのである。ペイター自身は、あまりにも自分に夢中になりすぎていたから、自分の学説が誘発するその論点を見通すことができなかつたようである。そして、ペイ

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ターはその結果にショックを受け、苦しんだ。ペイターが述べるように、その本で「その若者たちの中から間違った道に入ってしまう者がいないようにと」<sup>(52)</sup>不快感を与えた文章を『ルネサンス』の第二版から削除した。しかし、ダンには溶ける世界の幻想や、その因果関係から自分を守ってくれる人は誰もいなかったし、私たちはダンの中に一八九〇年代にペイターの後継者たちに関連する不穏な徴候をいくつか述べる事ができる。若者のときダンは、私たちが知っているように洒落者で放蕩者になった。耽美主義者たちのように、ダンは生き生きとした感動の技法を修め、偏狭な考えを破壊することを楽しんだ。『比較』には二つの傾向がでている。乱交を好む『無関心』や『愛の高利』のような詩が示しているのと同じである。堅くて脆い性質に加え破壊力のある警句の技法は、ダンが気に入る、ワイルドにひきつがれた。耽美主義者たちがそうすることもあったが、ダンは男らしくないと考えられていることに公然と反抗する喜びを得ていたように思われる。『香水』の中で自慢しているのは、香りをつける習慣があるという理由で女々しいと言われることである。

一番大切なことは、ペイターとダンの両者の中にその瞬間とそれを捉える必然性を強調しているのが見られることである。「あらゆる瞬間に」とペイターは私たちに警告を発する。「ある形が、手とか、顔の中で完全に成長するのである。」「あらゆる瞬間を区分するのはなく、私たちの周囲の瞬間の中の情熱的な態度とは、霜が降ったり太陽が照ったりするこの短い一日で、夕方になる前に眠ることである。」「一連の分離できる断片としての時を理解することで、時を安定化しようとするこの衝動は、ダンの詩の背後にある支配的な要素である。ダンは、瞬間を描く詩人である。他のエリザベス朝の詩人たちとは違って一般化された叙情詩を作る方には入っていない。

ダンは特異な例の中に人生を捉える。「今や、きみは一日中ぼくを愛した。」「そして、今、ぼくたちの魂におはようという。」「今は、一年の、また一日の真夜中」「今がぼくの劇の最後の場面」「今、この世の最後の夜だつたらどうだろう。」「<sup>(53)</sup>ダンは、詩行の中に太陽がカーテンを通して射してくる瞬間、涙が流れる瞬間、あるいは「さあ、もう止めにしよう、別れを惜しむこの接吻を」<sup>(54)</sup>というような二人の唇が離れる瞬間を取り入れ、工夫をこらす。最初の二つの言葉のなだめるような喘ぐようなリズムと、発音するときの唇を尖らせること、そしてその言葉の不統一が不鮮明な瞬間を捉えるのである。その時、精神は手探りで情熱から言葉を見出す。

時を止めたいという願いは、『影』についての講義の中で鮮明になる。ダンは、昼間の広範囲で目も眩むような瞬間を全体に成就した愛の率直さのイメージとする。恋人たち、太陽、そして影の互いに異なる道は、交差し共に閉ざされている。一瞬、人生は一枚岩でできたもののように明確になる。

立ち止まってくれ、そうしたら、ぼくはきみに  
愛の哲学の講義をしてあげよう。

ぼくらがここを歩いて過ごした三時間

二つの影は、ぼくらと一緒に歩いてきた。

しかし、今、太陽はぼくらの頭の真上にいるので

ぼくらがその影を踏んでいる。そして全てのものは、

素晴らしくつきりと切り詰められている。

そうだ、ぼくらの幼い愛が育っていた頃、

偽装と影とがぼくたちの身体や気遣いから流れ出た。

しかし、今はそうではない。<sup>(55)</sup>

影とか偽装が「流れ出る」ことが、止んで、時は固唾を飲む。次の瞬間、その仕組みは、再び人生の中へなだれ込む。第二連が始まると、この世は疑いと怖れの中で分離する。二人の愛が「この正午」に止まっていけないなら、二人のまわりには新しい影が出てくる、とダンはその女性に警告を発する。二人が詮索好きの世界から二人の愛を隠すことに努力しないのに対して二人は今や、お互いに騙し合うことを求めてしまう。そんなことが起こるとき、愛はすでに死んでしまっていることになる。

愛は、育つて行くのもまた、変わらぬ全き光。

正午を一分でも過ぎると、夜になる。

しかし、どのようにしてその女性がその事態を止めることができるのか。どのようにして太陽を立ち止まらせるのか、あるいは、影を動かさないようにするのか、自分の詩をこのような難題に投げ入れることによって、ダンは愛が崩壊していくことを当然のこととしたのである。愛には、十二時の時計のように存続していくたくさんの機会が与えられている。第二連の嫉妬深い疑念のために「素晴らしくくつきりと」はすでに消滅してしまっている。その詩は、自らを消している。

時の流れから強奪された一瞬一瞬が、このようにダンには魅力の源であり、絶望の源であったのである。思いが、こと宗教に向かうとき、特別な一瞬一瞬についての切迫した感情とその重大さが持続したのである。ダンの重要な着想は、表面場の移し換えはあるが、生き延びている。説教をする間、ダンは訴え、脅かし、警告を発し

ながらその瞬間を逃さず、責めたてる。まるで会衆と自分自身を脅かし、謹聴させているかのようである。「さあ今、立ち上がりなさい、今、この瞬間に」、「この瞬間に、さあ、さあ早く、キリストを求めなさい。」<sup>⑤</sup>この瞬間は、説教の特に最後に向かっている。そのとき、最後の砂粒が説教者の砂時計の中を滑り落ちていき、目の前を時が飛んでいる。

砂時計の砂がちよつと残っており、忍耐がちよつとでも残っているなら、残っていないかもしれないが、私が告げることが聞いほしい、残っているこの瞬間が、私たちが今、話題にしているその永遠なのである。その永遠は、この瞬間に繋がっている。そして、この瞬間に神さまがこの会衆の中にいてくださる。

あなた方一人ひとりの心に耳をお当てになって、あなた方をお願いすることに耳を傾けてくださるのである。ただし、あなた方を認めてあなた方を祝福するのか、この瞬間にも神さまを否定したことで呪われるかどうかは、分からないのである。<sup>⑥</sup>

何度も繰り返し脅すことで、ダンが怖がらせたいと思っているだけなく、怖さからでてくる不安も感じることになる。事実、この文を使って警告を発する策略の中には、全くの偽の基盤がある。キリスト教徒が信じているのは、神さまがいつもみんなの考えを知っていてくださるということである。神さまが特別な瞬間にも耳を心臓に当てていてくださることをキリスト教徒に伝えることは、キリスト教徒の心臓が鼓動を打っていることを伝えることと同じ一つの

情報としてである。だから、危機は全くない。しかし、詩の中でしているように、ダンは危機に到らせるためだったり、纏まりのない成りゆきまかせの日々の存在を乗りこえるために、危機をでっち上げている。

ペイターが瞬間を大切にするとダンの類似があるにもかかわらず、ダンの変化に対する態度の方がペイターのより生命力に溢れているし、変化に富んでいる。ペイターの散文は、高級な葬儀屋のように直ちに礼儀正しく、地味な雰囲気の中で変化を覆ってしまう。ダンがしばしばそうしていたが、ペイターは女性の不実を歌う詩の中で変化をあざげることなど夢にも思わなかったであろう。ペイターはまた終わりのない気紛れな物の世界に対して熱狂して反応することもできなかった。なぜなら、そんな世界は、すぐに自分や友人たちを単なるカルシウムやリンに変えることだからである。ダンにはそれができたのである。変化することでダンは生命を得たのである。永遠のような、変化に対する解毒剤を発明するために想像力を働かせるとき、その想像力は、液化とか溶解とかにダンが興奮するときと同じその生命力から生まれたものであった。

また、流体に対する転換は、ダンが興味を持つ唯一の物質的な変化でもなかった。流体から固体に、どちらからか蒸気に、同じように関わる変化をダンは発見したし、ダンが変り目に自分自身がいるとき、一番憂鬱になるのである。『祈禱集』で、ダンは憂鬱症について考えている。その病気で、医者が言うように死んでしまうこともあるからだ。単に蒸気が濃くなった空気によって死んでしまうことに不思議な気がするのである。このことから、ダンは極端に物質的な変化についての纏まった文章を導き出す。

もし、このことが雷や大砲によって空気を暴力的に揺り動かすなら、その場合、その空気は密度の濃い水の上で凝縮してしまう。固められた水は氷になり、殆ど石化し、石になると言っても良くなり、人を殺しても不思議はない。<sup>(8)</sup>

これは、ワーズワスが思いついたであろうような文章である。というのも、『抒情詩集』の序文で、詩人たちは科学者たちの段階に従って、感動を科学の目的のただ中に持つて行くことについて話しているからである。<sup>(9)</sup> 実際のところ、ワーズワスは英国の作家なら誰もがこんな風に進んできたのだと、明確には考えてはいない。しかし、ダンは考えていたし、爆風の効果についての文章はそのことをよく表している。空気は固まって石になる。すなわち、水は固まって氷になることを言っている。温度的にも物理的にも反対の物が合わされる。物理的現象は感情で満たされている。

蒸発作用も、ダンの好奇心をくすぐった。『熱病』の中で全世界は、女の息といっしょに蒸発してしまう。『終焉』の中では、恋人たちのキスが「二人の魂を吸いつくし、二人を蒸発させる。」息や溜息が詩の中で普通の肺疾患の症状としてではなく、死滅の型として扱われている。すなわち、事柄の例は精神的なものに流れているのである。血液は、霊を生み出すために働いている。天使が、その顔を作り、空気の翼を作るのである。両方が純化することに同じ興味を示している。説教集の中で、ダンは魂について語るが、魂が「蒸発」したり、肉体を通して「息をついたり、吐いたりする。」あるいは、もつと機械的に、ダンは水銀を熱すると蒸発するスピードについて述べている。<sup>(10)</sup>

毒が醸し出す精妙な憂鬱もダンには興味があった。毒の有効性を信じていることは、当時の劇が保証している。そこでは本や頭蓋骨にキスをしたり、花束の香りを嗅いだすることが普通に致命傷になる。「らい病やみの娼婦が息をする」という表現は、『香水』の中ではある種の毒気と考えられている。吸い込めば、死んでしまうのである。また、『腕輪』の中でのダンの呪いは、別の長く効く毒物を表している。

こんど身を屈めて拾うものには毒が含まれていて、

その毒気が敏捷にお前の湿った脳みそを腐らせる。(4)

蒸気は、頭の柔らかな中心部に到達するために鼻孔を貫いて『魂の発展』のネズミのように同じ不愉快な割り込みをする。しかし、それは蒸発するネズミであり、固体化したものというよりもっと鋭敏で狡猾なもので、ダンの精神にもっと魅力的である。ダンは毒についての文章に関して現代的であったと思われるし、『似非殉教者』に一六〇六年のフォレスツスの『デ・ヴェネニス』を引用している。

蒸発作用も、詩が構想している実体と非実体との間の変化によって暗示される。魂は肉体から切り離されている。肉体の上の空中に浮いていて、戻ってくる。「愛らしい栄光ある無」は肉の手足をとる。生きている女は夢の中に溶けるか、夢が生きている女に実体化する。物質ははかない。固定されていないものについてこのように固定することで、ダンがなぜ想像的な考えほどに豊かな錬金術を見出しただのかを説明するのに役に立たせている。もちろん、ダンは全体としてはごまかしであると疑ってはいたけれど。錬金術的な考えの中では、物質はどれも霊が浸透していて、果てしなく変形できるので

ある。溶解したり、純化したり、第五元素を抽出したり、それを凝縮したりすることは、錬金術師の分野であった。こういうことは、錬金術師が蒸留器を使ってする実験であった。その蒸留器の球が小さな世界であったし、そこで大きな世界が明示する物質の流れは閉じ込められている。結果として、ダンの想像力は蒸留器なしにはできなかつた。その上、蒸留器の中の変化は、単に観察されるだけでなく、支配もされるのである。荒廃の代理人は、召使いにもなった。そして、ダンにとって経験を左右するものに自分の自我を二重に重ねようと努めるとき、このことが経験を二重に魅力的なものにした。錬金術の専門用語によってもダンは解放された。専門用語が常にそうであるように、現実を和らげたからである。説教集の中で、ダンが自分の舌に錬金術の面白味を加えて重みのある多音節語を転がしているのを知るが、そのときダンは罪の赦しとか魂の救済のような主題について語っているように思われる。

金属が変わるとき、その金属が燃えて、液化するのには十分ではない。純粹なものからカスを分離するための洗浄も、またより良い金属にするように変質させることにも十分ではない。しかし固定化し、その固まったものでなければならぬ。その結果、金属は蒸発して無くなってしまうことはない。(5)

ここでのダンの錬金術への関わりについて、ミルトン・ラゴフは注釈している。「説教の中で大ほら吹き訳の分からない言葉で、このような記述を見出すのは、好奇心をそそる。」(6)しかし、その好奇心をそそるものは、ダンの批評家がそう感じるべきであるという



## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

ことである。ダンの説教集には、類似の記述が詰まっている。Ironで終わる単語は、ダンのお気に入りの代替物の一つである。一般的にここにあるように、物理的な課程に言及している。動揺、焼却、乾燥、加速など。なぜなら、このような名詞は、表現豊かな状況の代わりに動きのない、権威に溢れた音声形態をとっているからである。ダンの説教集は、正に宗教に関係しているのと同じく物質の変化の状態にも関係しているのである。驚くにはあたらぬのは、物の変化の状態がダンの生涯を占めているからであり、宗教はただにだけということがあるからである。

ダンの金についての好奇心が、錬金術にのめり込んで行くことになった。ダンの同時代の人々にとつて、金は神秘的で、半ば生きていた魔術的なものであった。金は、野菜みたいに太陽によつて養分を受け、熟成するものと当時の人々に信じられていた。パラケルススは「鉱物の木」として金属の地下の血管について語っている。水の中の根や地表に向かつて伸びて行く幹や枝についても。<sup>(6)</sup>錬金術師が教えた他の物質は、どれも金の条件にあがれている。それは、なぜ基本の金属が太陽の作用を通して土の中で金になるのかということがあるからである。ダンは、この価値を高めている信念の結びつきを共有している。ダンの地質学は、純粹に想像であるが、感動で一杯である。「金が一番産出する場所は、地球の顔のてっぺんが一番近くにある。そこで太陽の熱が一番良く混ぜ合わされるからである」<sup>(7)</sup>とダンは会衆に知らせる。さほど重要でない金属は、すべてこの完全性を達成したいと願っている。地下の層には、満足しない欲望がうごめいている。「よく配置された金属で、むしろ金になるもの」は、地球の「内臓」を満たしている。しかし、その金属が「太陽の力で金にされる」てっぺん近くにならぬなら、永久に失望する

ことになるだろう。<sup>(8)</sup>

ダンを魅了したのは、地球が温かく黄金の寄り合わせたものであるというこの考えだけではなかった。金がダンの好奇心を刺激したのは、金が不滅のものであり、途轍もなく無限に形を変えられる金属であると感じていたからである。金が形を変えてしまうと、金ほど良いものはない。ダンは、この点をベッドフォード夫人への書簡詩の中で高く評価している。

火も錆も一ドラムの金を消し去ることはできないし、  
消耗させられないで、最初にあったものが続くであ  
ろう。金が水、土、塩、空気の中に引き出され、無  
限に拡張したとしても、何からも傷つけられないで  
あろう。<sup>(9)</sup>

このように見てみると、金が変わらないことの最大と変わりやすいことの最大とを結びつけた。金はそれ以前に無限の様々な要素があつたが、いつも同じところに留まっていた。ダンのような想像力に溢れた趣味を持ち合わせた人にとつて、金は魅力的な鉱石見本であつた。金は自らの幸運を知っていれば、ほとんど始めるのを待つことができる。「金が話すことができるなら、金が望むことができるなら」とダンは私たちに請け合つて言う。「金は暗黒や鉱脈の中に眠っていることに満足するのではなく、外の世界に出たいと願っているのである」<sup>(10)</sup>詩の中で、ダンは金を独占的に働かせる。金はイメージの源泉としてダンには途轍もなく重要である。ダンが一番動かし金の特性は、金箔を作る中で例証されているように、拡張することにあつた。『自殺論』の中で説明するように、少量の金が「忠

実に延び、変形するという理由で、他のどんな金属の一万倍も伸びることになる。」<sup>(6)</sup>大きな数字の魅力は、いつものようにダンを虜にしたが、ダンの誇張が金箔作りについての事実以上に述べられているわけではない。そのことは、すでに古代への興味で論じられていたからである。プリニウスは、その推計をダンが知ってはいたが、一オンスの金が三インチ平方に七五〇箔に伸びると計算した。<sup>(7)</sup>現代の商売の実際は、これに改良を加えて一オンスから三インチ四分の一平方に一、二〇〇箔を作り出している。出来上がりが最小の薄さは、混じりけがないとか天候の状態のような変わりやすい要素によってきまり、はっきりと知られていない。しかし、ダンの生涯の中での信頼すべき計算は、メルセンヌの計算方法だった。彼は、一〇五平方フィートに一オンスの金の最終の領域とした。ダンの言葉である「無限に拡張したとしても」は、限界がないことを感じたいという気持ちの表れである。二時間の金箔打ちが終わると、金は光を通すほど十分に薄くなっている。銀の含有量によって、金を緑とか真紅に染める。ダンがこの魅力に気付いたことは、例え、ダンが事柄の用途の広さに価値を認める傾向になかったとしても、十分に自然であろう。金の塊りをハンマーを使って息で吹き飛ばせるくらい薄い膜に広げることが、ダンが続けて戻っていく一つの考えであった。

説教集の中で、おそらく金に触れる喜びに罪意識を感じていたから、ダンは一オンスの金を賛成できない内容にはめ込んでいたのである。金箔にされた金は、「消耗され、吹き飛ばされ、素早く無くなってしまふ」と宣言される。貨幣と化すコインは良いことではない。罪に汚れた性質を連想させるし、「役に立たない、軽薄な想像力」<sup>(8)</sup>や姦淫を伴う「奔放な議論」となるのである。それにもかかわらず、

ダンには金について話さずにはいられなかった。たぶん金でダンが思いつく、取るに足りないイメージの一つは、『別れの歌、悲嘆を禁じて』の中の恋人たちの魂についてのダン自身のイメージだった。

だから、ぼくたち二人の魂は、一つになって  
 ぼくが行かなくてはならなくても、裂けるのを  
 許すのではなく、広がっていくのを許すのだ。  
 金箔が宙に浮くほどの薄さに打たれるように。<sup>(9)</sup>

説教の不満を言う調子は、ここでは表れてはいない。弱々しい金属の膜の魅力は、見せかけではなく活かされている。金箔が魂に例えられるという事実は、テルトゥリアヌスが偶然同じように魂の成長を金箔の打ちだしに例えていたのだが、<sup>(10)</sup>薄さの両極端に金箔と魂を抱え込んでいる。金箔が脅して純粋な霊に変える。魂は、もはや全く実体のないものではなく、入れ物に敷いている煌めく金属箔の中に広がっている。これが取るに足らない想像にすぎないのかどうか、ダン自身も後に不愉快に感じていたこともあり、ダンはその基本的な魅力を越えられなかった。ダンの説教が発展させた金箔打ちの道徳的な見解は、便宜上のことであつたし、ついでの興味でもある。常に頭の中に残っていたのは、何度も何度もこのアツと言わせる事柄の変わりやすさの実例に戻らなければならない。

ダンの描く流れ込む宇宙は、事柄がすべて継続的に何か他のものに溶け込んでいて、数多くの惨事を含んでいたし、この惨事の中に人間の個性の概念が存在していた。引き続き二日間同じ人間であることを想像することは、ダンも分かっているように、科学的に根拠がはっきりしない。その上、二つの個性の間の関係としての愛の概

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

念は、幻想である。というのは、一時しのぎの状態で終わり無く動き回る結果があるだけで個性がないからである。ダンの恋愛詩は、無頓着にこの状況を受け入れていることもあるし、嘆き悲しむこともあるし、また『一周年記念』の中でのように、挑戦的に拒否することももある。その主題についてダンが最も十分に描き出したのが、『第二周年詩』の中である。

あなたは美を愛するか。

(そして一番価値ある美は、流れ込むことである。)

愛しはじめた彼女とあなたは、今では下手に騙される騙し屋ではない。

二人とも昨日から流れ込んで変化しているが、

今日には修復する。(でも、病んで) 最後の日々は

朽ちていく。

また、(川は名前を変えないけれど)

昨日の水の流れと今日の水の流れは同じではない。

そこで、彼女の顔が変形し、あなたの目も変形する。

聖者も巡礼もあなた方の愛している誓いに関係して

いたのに、今では留まってははいない。しかし、あなた

た方二人が変わらないと考えている間、あなた方は

いつも変化しやすいものの中にいる。(註)

穏やかで理性的だが、また恐ろしくもある。変形する顔を持った女や変形する目を持った男は、熱放射で犠牲になった人たちのように聞こえる。モンテーニュはダンと同じような結論に数年前に到達していた。「私たちは存在とコミュニケーションを持たない」と明確

に指摘している。なぜなら、あらゆる人間は連続した変化と動作の中にあり、一連の外見と影としてのみ理解し得るからである。「もしおそらくその存在を掴まえることを思いつくなら、まるで水を掴まえるために出掛けるみたいに同等になるだろう。」(註) ダンはモンテーニュに自然に引かれたであろう。しかし、変化という主題についてダンはモンテーニュの中にすでに知っていたことだけは発見することができた。モンテーニュはダンの著作全てに行き渡っている意識に客観的な系統立てを述べる。

その限界に突き動かされて、ダンが探求する議論は、『第二周年詩』を書くのを不可能にしたであろう。エリザベス・ドゥルリーを褒め称えるものとして、実在の人物がいたことを前提としている。しかし、もしダンが言うことが正しいなら、存在しなかつたのである。彼女は他の誰かのように宇宙の流転へと消滅するのである。もちろん、ダンの弁護の中で答えられているのかもしれないが、『第二周年詩』の中の詩行は変化していく肉体にのみ言及しており、一人の人物の霊的な自我は変化せずに留まっていると考えられているのだ。しかし、ダンが『ハリングトン卿の葬儀』の中で三年後にその主題に戻るとき、この区別は擁護できないし、霊性は肉体のように流転の中に含まれていることをダンは示している。

流れ込む美徳は観察されない。

また観想も持続できない。

肉体が変化するとき、また、私が昨年身に付けた

その霊、体液、血を身に付けていないとき、

そして、まるで私の目を流れに釘づけるかのように、

その雫は、私が観察したのだが、今、私の視界から

もつと多くの水で押し返されて、行ってしまう。

だから、この美徳の海の中では、誰も言い張れない。

美徳は、川のように過ぎて行く。(76)

事実、この当惑するような議論の状態にも関わらず、ダンが進んでハリングトンの詩を書こうとしているのである。実際のところ、ダンはその目的のために内なる流転について丁度言ったことを不完全に撤回している。美徳は川のごとく不安定であるけれど、まだ、どうにか「徳ある人がいたことをなお留めている。」あるいは、ダンが勝手にそう決めている。ダンを責めることはできない。推賞する詩を書き続けるもつともな財政的な理由があった。亡ハリングトンは、ダンの後援者ベッドフォード伯爵夫人ルーシーの兄であった。意識の流れと人間性の消滅についてダンの現代的な理論を推賞詩にすることは、一頭の馬にジェットエンジンを入れるようなものであった。不思議なことは、ダンがいやしくもそれを試みたことである。内部に一度であるが、それで詩がぶち壊しになったということではない。

不真面目だからとダンを責めるかわりに、私たちはもつと役立つように流動する人々に興味を持つことよってダンが受け継いできた詩的思考をいかに修正するかを考えることができる。『ソングズ・アンド・ソネツ』は、恋愛叙情詩の寄せ集めのように見えるが、大部分は自分がいかに不安定であるかということについての詩であることが分かる。このことは、不実であることに熱中する中だけにでなく、愛自体がいかに変化を加速させてしまうかについての論争の中にも表現されている。そのことは、詩の中の人物たちがお互いに当惑してしまったり、別れるときに形見を残したりすることに表

れている。おそらく、このことよってこそ、慢性の憂鬱と同じなのだが、ダンにはサユウナラということについて頻繁に書くことができたのである。愛する人から別れるという経験は、大多数の人々にとつて、人が自分になるために体得してきたものである一時的なもの。最も突然で承伏させる証拠を準備している。自分の生涯の一部が切断されてしまったという印象を持つであろう。ダンが最もいきいきとしたこの感情の再現は、『遺贈』である。

ぼくが最後に死んだとき、ぼくがきみのもとを去るたびに、ぼくは死ぬのだ。

それは一時間前のことで、

恋人の数時間は長い長い永遠なのだが、

まだ覚えている、ぼくが何か言い、

何か贈ったことを。

ぼくをここへ送り届けたぼくは死んだとしても、

ぼくはぼく自身の遺言執行人であり、形見なのだ。

ぼくがこう言うのを聞いた。彼女にすぐ知らせよ。

ぼく自身が、つまりきみのことだ、ぼくではない、

ぼくを殺した、と。そして自分の死を悟ったとき、

ぼくは死んだらぼくの心臓を送れと命じた。

ところが何と、心臓は見あたらなかった。

ぼくが切り開いて心臓のありかを探したのに。

再びぼくを殺したのは、生涯真実だったぼくが、

最後の遺言で、きみを騙すことがあったから。(77)

これは、当然のことながら人を不愉快にさせる詩である。代名詞を区分するために年をとる。そして、それが論点でもある。私たちはただ話者が分別を失っているのに耳を傾けるだけでなく、それを分かち合うために造られているのである。その男が見失った個性に困惑するのは、困惑の原理という鏡に映し出されるからである。ダンが「ぐるぐる回る目眩」と呼ぶものは、ペイターが「あの奇妙で、死ぬまで私たち自身を編んだり解いたりすること」として言及したものであるのだが、私たちが詩行の意味に取り組むときに記号論的に私たちに伝達される。その詩を理解できるのは、ダンの個性についての理論に唯一関係しているからなのである。詩自体で解釈するとき、男が恋人から立ち去る度に死ぬという主張は、正にたわごととして印象づけられるが、ダンの思想の文脈の中に置いてみると、それは、全体として真面目で、実に否定しがたいものとなるのである。自我が流れ込むことにダンが興味を持つのは、映像に心躍らせることで説明がつく。特に涙に映る映像である。溶けていく自分自身の複製、それも他人の目から流れ出てきたものを見ることは、一人の人間として復原力と離脱についての考えを再調整するような一つの経験である。『離別、窓ガラスに刻んだぼくの名』の中の当惑した人物にも同じ描写がある。そこで、窓ガラスを見るなら、そこに書かれたぼくの名と一緒に自分の顔を見ることになるだろう、とダンには愛する女に言う。光の屈折は、いかに愛がお互いの中に溶け込んでいるかを示している。「ほら、きみがぼくを見て、ぼくがきみになる。」<sup>(8)</sup>愛は、時のようにその正体を頻繁に変えてしまうから、恋人たちは、厳密には愛について二人の過去の経験を話すことはできない。愛は他の誰かのものだった。

奴は全く狂っていて、絶えず言う、  
おれは一時間も恋していたんだ、と。<sup>(9)</sup>

他方、ダン自身で『一周年記念』の中で一年間も恋をしていたことを宣言する。その矛盾した表現は典型的である。ダンの安定したものに對する願望は、不安定に由来しており、不安定に對するダン自身の感覚に負けまいとしている。

この型の相互矛盾は、『ソングズ・アンド・ソネット』に固有のものであり、批評家たちを悩ませてもきた。ダンは詩から詩へ自分の意見を変えている。例えば、『恍惚』の中で肉体的な接触が愛には必要であると論じ、『別離、嘆くを禁ず』の中ではそんなものは必要がないと同じ強い調子で論じている。ダンの詩は、論調においては信賴できない。一瞬軽率かと思えば、次の瞬間には穏やかである。『空氣と天使』は、そこで女が神々しい姿に変えられる不思議さを伴って語られるが、女の愛が男の愛より劣っていることについての安直な試みで終わっている。『形見』は、奇跡の女と「骨にからまる金髪の腕輪」の表現はあるが、女の身持ちの悪さに不平を言うのが組み込まれている。

墓も女の性質を学習して

一台のベッドに複数の男を入れようとする。<sup>(10)</sup>

このような矛盾した言い方に悩まされた批評家たちは、時間的な順序に詩を並べることで、前半に出てくる「皮肉っぽい」ものと後半の「真面目な」ものとに区分して切り抜けようとしてきた。このようなやり方は、絵空事である。なぜなら、ダンが大部分の詩を書

いた時期を特定する証拠はないからである。その上、ダンが段々と態度を変えて行つたと考えることは、ダン自身が変わりうることで包含していることと正反対になる。

ダンの詩を整頓するために二者択一を迫る批評的な手順は、詩から演繹するための愛についての一般的な記述であつたが、詩が含んでいる様々の見解を包含するためにははつきり言つて曖昧であつた。D・L・ピーターソンはこの手順をとり、ダンの哲学を我々のために要約している。

ダン自身の立場は、性欲が欲望の比率を決めたり、従つて人から自由を奪い取るかもしれないが、必ずしもそんなことをする必要はないように思われる。

比率の意味を維持できたり、従つて自分の自由をも維持できる人にとつては、相変わらず喜びの源であることができるからである。(註)

こんな風に粉碎して面白くなくしてしまうかぎり、これから研究する人たちは、少なくともピーターソン氏の理論を採用するのを止めた方がよい。もしダンの詩が、本当に提示している詩行に沿つて要約されるなら、詩を読む際の要点など無いのははつきりしている。事実、詩の内なる矛盾した事柄と論調の疑わしきがあるから、詩はどんな種類の要約も受け付けないし、それが詩の価値を決める理由なのである。詩は一つの「立場」を取らない。詩は包含されることを拒む。詩は思想と感情を留める。詩が私たちに示すのは、A・J・スミスが述べたように、一人の人間が様々に経験する愛の形の違いがその人間の愛の理解の一部であるということ。そして愛するこ

とは、様々のことを意味するし、そのどれも排他的ではない。(註) そのとぎれとぎれの不機嫌で詩的な声とその無愛想な論調の変化は、技法を通してその技法が個性的に抑制する経験の中のいつもの誤りに陥ることを私たちに伝える。意識の同じ瞬間の中での耳障りな要素は、棚上げされずに認められる。これが上手く行っているのは、言葉と同じくらいリズム感があるからである。ダンのリズムによつて、強調されたり踏みにじられたりした韻律の基準とは何か、という感覚が与えられる。瞬間の強勢のある音節と対抗するためである。緊急事態に同じように合わせることは、ダンの複雑な連の形態が示している通りである。ダンには全部で四十六の異なった形態を使つて、その二つだけは一度以上使っている。新しい形には一つひとつ新しい努力が必要である。

詩の中で、普通の人々が毎日の生活しているように、安定の共通源は、思想と感情が相互に浸食し合う結果である。情緒的な批評家は、ダンの中の思想的な要素を嫌い、そんなものは無いかのごとく振る舞うことがある。例えば、C・D・ルイスが『熱病』について言っているのだが(ルイスが許容できる二つのダンの詩の一つでもある)これは「音楽と感情のただ一つのほとばしり」である、と。事実、最初の半分の詩行を読んだ後でも興味を失わなかった人は誰でもこんな風に言うことはできなかった。「死んではいけない」は、心からの叫びとしての印象を与えるが、その後で、私たちが見てきたように、ダンの頭脳は深遠な思索を引き継ぎ、際立たせる。中程で終えるまでには、ダンには十分に心を奪われてしまつていて第三人称の女性(「だが彼女は衰弱しない、」)に言及する。冒頭的情緒が爆発するこの型は、思想に壊されることになるのだが、頻繁に存在する。

『終焉』はもう一つの例である。疼くような優しい出だしの後（「さあ、もう、この最後の別れのキスから離れなさい」、思想はその着実な計算に基づく救済に到達する。最後の詩行によって、感情の至福は安全に背後に残されていて、その表現は組み立てられて整然としたアンチテーゼ（「別れること、別れる、と命ずることで二度死んでいる」）になっている。もちろん、それについての確かでしたっきりとした規則などはない。私たちは、他の道に進展していく詩を簡単に見い出すことができる。例えば『像と夢』の中で、感情が思想を打ち倒す。最後に、ダンは頭ではなく心を選ぶ。

ぼくは、彼女の愛に満たされて、多情で気が狂った方がましき、心なき馬鹿者でいるよりは。<sup>(8)</sup>

三つの例が全て持っているものは、流動性である。ダンの詩は、じつとしてはいいないし、閉鎖したままでもない。解放されていて出だし以上に別の考えや経験に向かっているから、読まれている間中作用している印象を与える。ダンの詩には新しく経験に基づいた感覚があり、新しい道路の拡張をするように、タール沸かし機や砂利トラックやシャベルを使う作業員たちを通りすぎて進まなければならぬ。作業の成果はまだ固まっていないうし、道路の表面は半ば流動的である。

第一次世界大後の英国の作家や批評家の世代に、この固定化されないダンの詩こそが受けているように思われる。若き日のエリオットは「ダンが発見する感動の迫真性、それもダン自身が感情の複雑さとその素早い変更とアンチテーゼを認識していたこと」<sup>(9)</sup>を称賛しようとして選んでいた。オールダス・ハックスリも同様に心理的な現

実主義をダンの作品の「重要で独創的な質」<sup>(10)</sup>であることを発見した。そしてヴァージニア・ウルフは、ダンの持っている「角のとれた見た目に美しい全体を組み立てるのを助ける類似ではなく、見せかけを解体する矛盾、すなわち、私たちが愛とか憎しみとか笑いの違った感情を同時に感じる力を記録しようとしたこと」<sup>(11)</sup>を称賛した。この批評が強調しているのは、それに伴う流動性がダンの世界や自分自身についての考えの中で重要であるという程度の理解ではなかった。しかし、それにもかかわらず、述べられていることは、正しく、洞察力があった。ダンの自分の詩についての語り方は、あったとしても語る機会がまれであったのだが、過去の瞬間を振り返りながら、短時間で、信頼に足らぬものとして詩を見ていたことを同じく示している。ダンには、手紙の中に「ぼろ」とか「閃光」とか「蒸発」<sup>(12)</sup>として同封する詩に言及する。説教の中では、ダンがさらに一般的に韻律の構成を論ずるときでさえ、安定しない過程として詩の見解を保持している。「詩の全体の枠組みは、一片の金から打ち出したものである。しかし、最後の文章は切手の印象としてあり、それを最新のものにするのが」<sup>(13)</sup>最後のところでの強調によって、特に詩へ十把ひとからげに引用してしまうと、ここでは少し誇張されているように見えてしまう。しかし、その強調によって、十分に上手く組み込まれることがある。それは、詩を通してのダン自身の際立つ変容やダンの韻律の発展であり、それについて結論を出すのが賢いのは、結論に達してからであると思わせるセンスである。あるいは、それに加えて、結論が出される時である。なぜなら、ダンの詩の中にある態度の葛藤は、人間の個性の中にある解決できない混乱に関係するし、ダンが陥っている混乱を十分に生き生きと認識できることもあるが、ジョージ・ハーバートの中で単純化できる

ことも時々あるのに比べ、本心ではない声としての詩の側面と真実の声として別の側面を一致させることで事柄を単純化することはできない。ダンの中のこのような手なすけにくい複雑な反対目的の例として、私たちは『幽霊』を取り上げることができる。

ああ人殺しめ、お前の嘲りで、ぼくが死んで、  
お前はぼくの口説きから

すっかり自由になつたと思う、その時

ぼくの幽霊がお前のベッドを訪れて、処女を装って  
ぼくより劣る男の腕に抱かれるお前を見る事になる。

その時お前の怯えた蠟燭は瞬きを始め、  
その時お前という男はもう疲れはて

揺すつても起こそうと抓つてもお前がさらに  
要求していると思ひ眠つた振りをして

お前から身を縮めるだろう。

すると、無視されたお前はポプラの葉のように震え  
冷たい水銀の汗に浸ってぼくより

本物の幽霊になつて横たわるだろう。

ぼくが言うことは今はお前に言わない  
留めておかないためだ。ぼくの愛が終わつたから

お前がぼくの脅しでじつと誠実であるより  
むしろお前が苦しんで懺悔する方がいい。<sup>(8)</sup>

この詩は、ダンの「ペトラルカ風」と呼ばれるの詩の一つとして  
推薦されてきた。軽蔑された男が女を人殺しと呼んだり、復讐する  
と言つては脅すのは、ペトラルカの模倣者たちが好んで取り入れた

がる役割であるのを根拠としているからである。セラフィノは、自分  
が死んだ時、お前のところに化けて出て、俺を拒んだ日にお前を  
呪うぞ、と警告する詩さえあるのだ。<sup>(9)</sup>『幽霊』は、そのドラマ性と  
機知だけではなく、その矛盾があることからでも、全体としては違つ  
てはいるのである。冒頭で、ダンは報われない愛で死にかけている、  
と宣言する。だが、最後では、愛は終わつたし、ぼくの死後、お前  
がぼくの愛を承諾し、ぼくの命を救うよりお前がむしろ苦しむこと  
になるだろう、とダンには女に告げる。どのようにして愛で死にかけ  
たり、愛を失つたりするのか。女を愛しているのか、いないのか。  
男はまだ愛の中にいて、愛で死にかけている振りをして、女に恥を  
かせようとしているのか。あるいは、女が取り返しをつかなくく  
らい男を痛めつけ、ことよつてのみ理解出来る嫌悪を正当化するた  
めなのか。あるいは、実際にはまだ恋愛中であるのか。男が怒りの  
中であつて女に仕返しをしたいから愛してはいないと言っているのか。  
あるいは、口に出せる一番残酷なことにもなるが、ただ女を脅して  
代わりに男を愛するようになるからなのか。このように違つた可能  
性は、それぞれその詩が示す二者択一を使い切ることはない。しか  
し、その根底にある混乱した動機を示すのに十分なのである。

さらに、その詩はその可能性を区分せず二者択一に向かう。そ  
の詩が、たちまちその可能性を暗示する。人間の心を単純化した理  
由の中でのみ、正反対の感情を両立しないものと考えなければなら  
ないことを私たちは気付くことになる。ホーソーンは、適切に『緋  
文字』の中で大胆に述べている。

憎しみと愛が実際に同じであるかどうかは、見たり、  
聞いたりする好奇心溢れた問題である。どちらも、極



限に発展すると、高い割合で親しさと心を知ろうとする。どちらにも、相手に自分の愛情や精神的な生活の糧に頼っている人に尽くす。どちらにも、激するように愛する人や同じく激しく憎む人を置き去りにする。なぜなら、自分の目的が無くなってしまおうと、見放され、見る影もなくなってしまうからだ。それゆえに、哲学的に考えると、二つの情熱は本質的に同じであるように思われる。<sup>(9)</sup>

『幽霊』と比べ単調ではあるが、これはその同じ根拠を打ち破っている。死の中にさえ、ダンは女性を追求せずには想像できない。その詩の難しく巧妙な調子が、女性を傷つける武器として、あるいは自分自身の支離滅裂な感情を隠す楯として採用されるかどうか言うのは不可能である。辛辣さと冗談は、人生の中の一方の目的か、両方かの任務を果たす。どっちが最優位かを私たちが想像できないことは、私たちは毎日の観察から期待するにすぎない。

『幽霊』は極端な例ではあるが、それが一つではない。態度が複雑であるのは、ダンの中では通常のことであり、詩の中の変化、あるいは矛盾に由来する。その複雑さは、謎解きではなく、人生のように未知であり解決不能なのである。複雑だから、私たちは入っていけない。人間だって同じ事である。人間が関わるから、明快な内側の意味を見出すためにその複雑さに割り込んでいく機会がないのである。私たちは、推測しなければならぬし、私たち自身の経験以外続けていく事は何もない。その複雑さを理解しようとする時、私たちは感謝する。私たち自身の分裂を生ずる衝撃へと向かう。それが詩を教訓的にする。『幽霊』がそうであるように、あるいは、同

じような例として『トゥイックナム庭園』のように、そこで話者は、自分を「自らを欺く者」と呼ぶ。愛をその庭に携えて来たためなのである。だが、「愛しながら去る」<sup>(10)</sup>ことがないようにと祈る。この自己矛盾は、話者によって表面上は見過ごされているが、他のものは存在する。そこで話者は、これみよがしに言ってきたことを拒否する、あるいはそうしているように見える。『女の貞操』を取り上げてみよう。

きみは丸一日ほくを愛したのに、

あす去っていく時なんと言うつもりなんだ。

それで新しい誓いを昔の日付にするつもりなのか。

それとも昔のほくたちは違う人間なんだと

今は言うつもりなのか。

それとも愛の神、その怒りの畏敬の怖れで

交わした誓いは誰でも背誓できるとでも。

それとも真実の死が真実の結婚を解き放つように

恋人たちの契約は、結婚の姿で

死の姿の眠りまでだけ結ばれて、解かれるのか。

それともきみの目的を正当化するために

目的を持った変化と欺瞞があったから、きみは

真実であるために欺瞞以外に道はないと言うのか。

虚しいおばかさん、こんな弁解には反駁も征服も

できるさ。その気になればね。

それは差し控えよう。

明日までにはほくもそう考えるかもしれないから。<sup>(11)</sup>

この詩についての解釈して、ウィルバー・サンダースは、女は「娼婦」<sup>(4)</sup>であると事もなげに言う。しかし、事もなげさを売り物にする詩ではない。女は、本当に不貞なのか。翌日男のもとを去って行くという告発は、全く根拠がないだろう。ただ不安と対立の男自身の感情の表れなのである。自分が女を置き去りにするという話者の警告でも不安に陥るだろう。ぼくは軽く見ることはできないのだ、と男は女に警告する。なぜなら、男は自分がいかに深く熱中しているかを女に悟られるのを恐れているからである。あるいは、それを別な解釈してみると、全体に爆発しているのは、話者自身の背信の口実なのである。女ではなく、その男が、翌日去ろうとしているのである。女ではなく、結局その男の方が、不貞のための議論を取りまとめている。男が女に攻撃するのは、単に女を追い払うと同時に独善的であることの一方法なのである。このような読み方の間を選ぶ必要がないだけでなく、そんなことはできないのである。決定するため、私たちは、その男とその女についてもっと知る必要があるであろう。どちらも存在しないのである。分かっていることと言え、詩を語っている声である。詩の中で不安定と不貞は、不安げに気紛れに混ぜ合わされている。声は意見が決まらないし、生きていて、死んでいないで、解決する。その詩が公然と示す独特の優柔不断な態度は、偶然とは言えダンには全く自然である。見てきたように、ダンには個人的な流動（「昔のぼくたちとは違う人間なんだ」）を信じることに同意したが、同様に『一周年記念』のような詩の中で信じることを否定しようと努力した。このような衝動は、『女の貞操』がしているように、信念を受け入れると同時に公然と非難する詩の中で和解されるだけである。

『別離、窓ガラスに刻んだぼくの名』の最後で到達する変化は、

また違っている。というのは、変化は突然に私たちが読んできたその詩を無視する。単なる主張として詩を自分のではないとする。小さな骸骨が窓ガラスに刻まれていて、旅に出ている間に恋仇に対してダンの利益を守らなければならぬという考えは、事実、その詩の全体的な骨組みではあるが、その話者が提示しているように意味がないのである。

しかしガラスや文字が

ぼくらの堅固で本物の愛を守る術となつてはならぬ  
迫り来る死がこのような無気力を押しつけ、  
眠りの中でこんなことをつぶやく。

このたわごとをぼくが出掛けるせいにしてくれ、  
死に行く者は、こんな風に語ることもある。<sup>(5)</sup>

ダンは、ここで敏感に劇的調子を処理している。この連は、私たちを現実と堅固で本物の愛に引き戻す。無愛想な自説の取り消しは、怖れを切り抜ける。だが、怖れは、ことばで言い表されてきたし、逃げて行かないであろう。怖れを無視しようとすることは、その脅威をもっと明確にするだけである。最後の連は、その詩の残りの部分打ち消すから、その詩の残りの部分が、最後の連を打ち消すことになり、その小気味の良さを怒鳴り散らしているようにしているからである。そして話者は、謝る雰囲気でのろのろと進む。そんなものは、話者の信頼の中で読者の信頼を勝ち得るには何の役にも立たない。ダンが示す不安定さは、安定の反対語ではなく、安定の影なのである。

## 『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

この章の目的は、変化がダンにとって着想と知性に溢れた潜在能力が詰まった概念だったことを示すためであった。同時代の他の人々のように、ダンには変化に直面したとき、憂鬱とか苛立ちを心に留めるくらいであつたけれど、その本当の役割は、同類の変化であつた。変化によって、この世と自分自身についてダンには解釈が容易にできるようなつたし、自らの創造性を刺激された。変化すること、ダンには、精神が揺り動かされる現実のあらゆる分野を包括し結びつけるだけの幅広く多様に支配することに興味を持つことができた。またダンの心をいつも占めていた神学的な問題やそれについて取り上げた教義的な立場を決定することにも役に立ったのである。丁度『ソングズ・アンド・ソネット』の主題と様式やそこに含まれる多種多様な態度を決定したのと同じである。遠回りしているが、理解可能な方法で、変化は同様にダンの倫理的関心と社会的関心に影響を及ぼした。例えば、誰もが仕事を持つべきであるというダンの主張は、変化についての強迫観念から直接的に出ている固定化されることへの情熱と関係がある。固定と変化は、順番に、ダン自身の無目的や矛盾と神がこの世を創造された時、無を有に変えたという概念についてのダンの心のときめきに関連している。この最後の概念は、実際には、どんな明白な方法でも専任で雇われることの必要性と関連しているのではなく、ダンが繰り返しその関係を詳細に述べて、論じている。仕事を手に入れて自分を変えて何者かになることは、無であつた時あなたを何者かに変えてくれた神への唯一適した償いである。その論議は、不合理ではあるが、辛抱強い道を示す。その中で道徳的な確信は、想像的な好みの中で支持を受ける。おそらくその通りなのだろうが、変化がダンの思考の中で中心になったのは、ダン自身が変化することで好奇心を掻き立てられたか

らなのだ。十八歳の時に描かれた肖像画に付いていたモットーは、これが自分を熟視する時に選び出していた要素だったのである。その微妙にどちらにも取れるモットーは、ダンのモットーに対する反応の複雑さを示している。そのモットーは、生涯を通してダンの内省の中心であり続けた。会衆に向かって「ここにいる私が全てとは限りません」と告白する説教者ダンは、『ソングズ・アンド・ソネット』を書いた詩人ダンと同じ人物であつた。その人物は、詩集の中に見られる人物の思想とか態度によって巻き込まれなままであるための同じ救済の力を持った証拠を示していたのである。それぞれ詩の変わりやすく矛盾した声は、究極的にはダンの個性の働きであつた。その声は、詩の文字面とか、修辭的人物が扱っているものに属しているのではなく、その作者に属しているのである。

## 原注

- (1) *Epithalamions* 32; *Sermons* vi, 324.
- (2) T. E. Terrill, 'A Note on John Donne's Early Reading', *MLN* 43 (1928), 318-19.
- (3) *Paradoxes*, 1.
- (4) *Devotions*, 54 (*Expostulation* VIII).
- (5) *Pseudo-Martyr* Preface.
- (6) *Divine Poems*, 15.
- (7) *Sermons* vii, 264-5.
- (8) *Sermons* x, 56.
- (9) *Sermons* v, 249.
- (10) *Sermons* iii, 110.
- (11) *Gosse* i, 306.

- (12) *Sermons* ix, 134.  
 (13) Gosse i, 191.  
 (14) *Satires*, 70.  
 (15) *Elegies*, 56.  
 (16) *Essays in Divinity*, 14.  
 (17) *Sermons* i, 249, 273 ; iv, 148 ; vi, 124 ; viii, 176.  
 (18) *Sermons* iii, 50 ; also ii, 247.  
 (19) *Sermons* iv, 100 ; also 85.  
 (20) *Essays in Divinity*, 76.  
 (21) See Arnold Williams, *The Common Expósito* (Chapel Hill, N.C., 1948), 80.  
 (22) *Elegies*, 85.  
 (23) *Sermons* iv, 85.  
 (24) Augustine, *The Free Choice of the Will*, Bk. III, ch. 7.  
 (25) Aquinas, *Summa Theologica*, III, Q. 98, Art. 3.  
 (26) *Devotions*, 72 (Meditation XI).  
 (27) Frank Kermode, *John Donne* (1961), 23.  
 (28) *Sermons* vii, 271 ; also iii, 227, and ix, 305.  
 (29) *Sermons* vii, 259.  
 (30) *Devotions*, 12 (Meditation II).  
 (31) *Sermons* i, 266.  
 (32) *Devotions*, 13 (Meditation II).  
 (33) *Sermons* iv, 70, 159 ; ix, 154, 177.  
 (34) *Satires*, 45.  
 (35) *Elegies*, 62—3.  
 (36) Allen Tate, 'The Point of Dying', *Sewanee Review* 61 (1953), 76—81.  
 (37) *Epithalamions*, 14.  
 (38) *Satires*, 58.  
 (39) *Elegies*, 1—4.  
 (40) *Divine Poems*, 15.  
 (41) *Epithalamions*, 42.  
 (42) *Elegies*, 69, 85, 74 ; *Divine Poems*, 8.  
 (43) *Elegies*, 41 ; *Satires*, 45.  
 (44) *Sermons* iii, 65.  
 (45) *Sermons* iv, 337.  
 (46) *Sermons* x, 52 ; viii, 62, etc ; vii, 217.  
 (47) *Elegies*, 11.  
 (48) *Elegies*, 20.  
 (49) *Sermons* i, 230 ; ii, 306 ; iii, 127.  
 (50) Walter Pater, *Selected Writings*, ed. Harold Bloom (New York, 1974), 59—60.  
 (51) *ibid.*, 60—1.  
 (52) See Michael Levey, *The Case of Walter Pater* (1978), 144, 183.  
 (53) *Elegies*, 42, 70, 84 ; *Divine Poems* 7, 10 ; see, on this aspect of Donne's Poetry, Robert Ellrodt, *L'Inspiration personnelle et l'esprit de temps chez les Poètes métaphysiques anglais* (Paris, 1960), I, i, 82—4.  
 (54) *Elegies*, 36.  
 (55) *Elegies*, 78—9.  
 (56) *Sermons* iii, 133 ; i, 250.  
 (57) *Sermons* vii, 368—9.

『ジョン・ダン入門』—背信と野心の詩人—

- (85) *Devotions*, 77 (Meditation XII).
- (86) *Lyrical Ballads*, ed. G. Sampson (1930), 26.
- (89) *Sermons* ix, 176.
- (90) *Elegies*, 8, 4.
- (92) *Sermons* v, 314.
- (93) Milton A. Rugoff, *Donne's Imagery: A Study in Creative Sources* (New York, 1962), 61.
- (94) Paracelsus, *The Hermetic and Alchemical Writings*, trans. A. E. Waite (1894), i.92.
- (95) *Sermons* i, 163, 272.
- (96) *Epithalamions*, 12.
- (97) *Satires*, 95.
- (98) *Sermons* vii, 410.
- (99) *Biathanatos*, 155.
- (70) Pliny, *Natural History*, xxxiii, 19.
- (71) *Sermons* iii, 148; v, 124; vi, 57; vii, 403; viii, 119—20.
- (72) *Elegies*, 63.
- (73) Tertullian, *A Treatise on the Soul*, ch. 37, in Ante—Nicene Christian Library, ed. A Roberts and J. Donaldson (Edinburgh, 1870), xv.
- (74) *Epithalamions*, 52.
- (75) Montaigne, *Essays*, trans. Florio, ed. W. H. Henley (1893), ii, 331.
- (76) *Epithalamions*, 68.
- (77) *Elegies*, 50.
- (78) *Elegies*, 64.
- (79) *Elegies*, 51.
- (80) *Elegies*, 75, 89.
- (81) D. L. Peterson, *The English Lyric from Wyatt to Donne* (Princeton, N. J., 1967), 305.
- (82) A. J. Smith, 'The Dismissal of Love', in *John Donne, Essays in Celebration* (1972), 89—131.
- (83) *Elegies*, 61, 36, 58.
- (84) T. S. Eliot, 'John Donne', *Nation and Athenaeum* 33 (1923), 331—2.
- (85) Aldous Huxley, 'Ben Jonson', *London Mercury* 1 (1919), 186.
- (86) Virginia Woolf, *The Common Reader: Second Series* (1932), 24—39.
- (87) Gosse i, 171, 197.
- (88) *Sermons* vi, 41.
- (89) *Elegies*, 43.
- (90) D. L. Guss, 'Donne's Petrarchism', *JEGP* 64 (1963), 17—28.
- (91) Hawthorne, *The Scarlet Letter*, ch. 24.
- (92) See Leonard Unger, *Donne's Poetry and Modern Criticism* (New York, 1962), 54, 72, etc.
- (93) *Elegies*, 42—3.
- (94) Wilbur Sanders, *John Donne's Poetry* (Cambridge, 1971), 46.
- (95) *Elegies*, 66.